平成29年度秋季シンポジウムは11月4日（土）鶴見大学会館地下1階メインホールに於いて「中世の考古学と文献史学を結ぶ」と題し、講師に村上市教育委員会文化行政推進室室長吉井氏と本学文化財学科教授伊藤正義氏を迎え開催された。

　吉井氏は「越後色部氏館―平林城の発掘調査成果―」と題し、色部氏の平林城跡における発掘調査成果をご講演なされた。

　現在の新潟県北部を有していた小泉庄には大川城・大葉沢城・猿沢城・村上城・平林城の５つの城跡が残っている。

　平林城は小泉庄の大名である色部氏の居城及び山城であり、現在でも土塁や堀など中世の姿を残している。昭和29年に県指定史跡に指定され、昭和53年には国指定史跡に指定された。平成に入り国有化が進み、整備が進められている。

　平林城の居館部は南北２４０ｍ東西４００ｍの区間を三角形に堀と土塁で仕切られている。最大で標高差８ｍの傾斜面に作られている為、上から殿屋敷・中曲輪・岩館と３つの大きな曲輪で区分けされている。

昭和49年の平林城の発掘調査では、色部氏の領主の住まいがあった殿屋敷の南に位置する南掘（殿堀）から木製の柱脚2列6本が検出された。この柱穴からは新潟県で初の事例となる木簡が出土した。南堀に接する表虎口からは新潟県において神社仏閣でしか見ることのない礎石が門址から出土した。しかし、門の構造上4つ出土するはずの礎石が３つしか検出されなかった。また平成23年～29年の発掘調査において門址の南に一部が野面積みの様な石組を施されている溝が検出された。この溝は中曲輪へと続き、丸太をくりぬいた木管を用いたと思われる暗渠が検出された。またこの調査において小泉庄の領主の住まいだと思われる柱穴も検出されている。

　出土遺物は、全体を通し16世紀前半～後半とみられる白磁・青花茶碗や瀬戸・美濃焼の天目茶碗などといった中国・日本の陶磁器類、板葺き屋根のものと考えられる杉製の板材などが出土した。この時出土遺物を利用し年代分析を行う際の注意点として、茶道に使う茶碗など使用頻度が少なく、なかなか割れにくいものは何十年と使用され続ける場合があるため、出土遺物が必ずしも年代を決める材料にはなりえないという点が指摘された。

まとめでは吉井氏は平林城の出土遺物の少なさや曲輪ごとの機能、城跡の上限年代の解明などを今後の課題として述べられた。

続いて伊藤正義氏は「色部氏年中行事と瀬波郡絵図の世界」と題し、色部氏年中行事と越後国瀬波郡絵図から見た色部氏と平林城についてご講演なされた。

初めに色部氏年中行事という在地の年間行事をまとめた文献資料と越後国瀬波郡絵図という関白秀吉の太閤地検の命により作られた郷絵図を紹介し、文献資料と郡絵図といった文献史学の成果が考古学により検証された稀有な例として色部氏・平林城の吉書始めと椀飯の儀式について挙げられた。

　吉書始めと椀飯の儀式とは戦国時代の色部家中で最も重要な行事であり、正月3日に石瀬の清水山青龍寺から届けられる「正月吉書」を読み上げ、色部領・色部家中・色部領民の安寧と五穀豊穣、来世に渡る極楽往生を神仏にぐ 儀式である。

　この儀式には青龍寺・色部家様・21名の家中・御百姓衆が参列する。しかし平成23～29年にかけての発掘調査で検出された儀式空間であったと思われる殿屋敷の推定「色部御殿」の遺構を復元すると、建物内に儀式の参加者が納まらないことが判明した為、御隠居の居住の場ではないかと述べられた。また色部御殿の復元のデータから柱の細い質素な建物であったことが推定され、水戸黄門晩年の簡素な隠居所である「西山荘」を隠居所の事例として挙げられた。同遺構で検出された柱穴の切り合いについて、文禄三年員数目録に記載された、朝鮮出兵に参加せず平林城・色部館の警備係となった「平林在番衆」が詰めていた在番所であったと指摘されている。御隠居であった色部顕長没後に隠居所から在番所へと建て替えられたと同時に殿屋敷の使用期間の短さ、色部氏が金沢に移封される際に建物を除去した事を挙げられ、殿屋敷の遺物の少なさについて考えを述べられた。

　瀬波郡絵図の平林城には、葺きという最高の位の屋根を利用した建物群や領主のシンボルである松林が描かれていること、また平林城以外の城館を描かないことから、若くして領主となった色部龍松丸の領主権・統治行を主張した郡絵図であると指摘された。そのため在番所に建て替えられた統治行と関係のない殿屋敷は郡絵図には描かれなかった。また瀬波郡絵図には肥前名護屋在陣の激務の為病死した先代の色部長真と先の戦で関東奥惣無指令に違反した色部氏の処遇について、関白秀吉に憐憫の情を仰ぎ、若くしながらも領主としての統治を全うしている龍松丸に特別な配慮を願うメッセージが込められていると述べられた。

　まとめでは文献史学と郡絵図研究には「妄想力」が必要である事、文献史学と考古学研究の間に生じたズレに意味がある事、またそれらの文献史研究・郡絵図研究・考古学研究の協議と相互批判によって進められる越後国の戦国の村町と城館の研究が、戦国社会と戦国の世を生きる人々の姿を解明する可能性を広げるのではないかと述べられた。

対談では現役の学芸員である吉井氏による経験談や現場の声、また考古学と文献史学という２つの視点から色部氏・平林城について各講演者の意見が交わされ、積極的な質疑応答が行われた。